

仲川恭司教授を送る辞

小林 恭 二

仲川恭司先生は、昭和三十九年手島右卿先生に師事され、書家としての人生をスタートされました。手島先生はその二年後に発足した専修大学文学部の初代教授となりましたが、思えばこのときから仲川先生と専修大学の繋がりが始まっていったといえるかもしれません。

昭和五十七年、仲川先生は専修大学文学部に専任講師として御入職されました。五十九年に助教、平成二年に教授と役職を進められ、平成十四年には推されて日本語日本文学科の学科長に就任されました。他にも学生部委員、教員資格審査委員会委員等の学内委員を務められ、専修大学に貢献されてきました。教育面においては、専修大学の書道教育の中心として、長年講義や演習で有為な人材を育てられただけでなく、書道教育に必要な兼任講師の方々を、適材適所で毎年途切れることなくお招きいただいた功績は、学科として到底忘れることはできません。

その間、学外における活躍も目覚ましいものがありました。昭和四十六年の毎日書道展毎日賞受賞を皮切りに、毎日書道展グランプリ会員賞、第一回書道大賞新人賞、第一回手島右卿賞等各種書道賞を受賞されました。また毎日書道会理事、全日本書道連盟常務理事、独立書人団理事長等の重職をも歴任されています。今や先生は日本を代表する書道作家とみなされ、その名声は世界に及んでいると行って過言ではありません。

その作品は日本の各種公共施設はいうに及ばず、ベルギー日本大使館、イタリア日本大使館、フランス国立ギメ東洋美術館等世界中で愛蔵されています。専修大学においても120周年記念館の揮毫等仲川先生の書作品は随所で見るこ

とができます。

仲川先生は研究執筆活動もまた旺盛になされました。啓蒙的な一般書はいうまでもなく、師である手島右卿の業績検証、顔真卿、王羲之の書法に対する研究、更には漢代の文字瓦当の研究といった考古学的意味合いを持つものまで、その興味対象はひじょうに幅広く、藝術家であると同時に優れた研究者としての一面も有しておられました。

こうして仲川先生の各方面での業績を振り返りますと、専修大学文学部にとってまさに得難い人材であったという感慨を新たにします。

しかしながらわたくしたち同僚にとつて、先生がときおり見せてくれたひじょうに人間的な一面も忘れることはできません。平生の先生は温容を保ち、ユーモアを絶やさず、藝術家の圭角を見せることなく飄々としておられました。しかし事にあたっては毅然とした態度をとられ、犯しがたい威厳を垣間見せられることもありました。近年先生はいよいよ虚静恬淡たる雰囲気を纏われるようになり、先生がおられるだけで周囲がなごむといつていいほどでした。

先生から教えていただきたいことはまだまだ多くあり、専修大学のキャンパスを去られるにあたって惜別の思いは尽きませんが、日本語日本文学文化学会を代表し、感謝の気持ちを込めて送別の辞とさせていただきます。

二〇一五年十一月